

心の声に導かれ、イルカ船の船長に

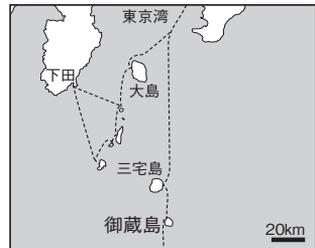
イルカカウオツチング船「海豚人丸」船長・ネイチャーガイド／イターーン 加藤啓司

住民三〇〇人、イルカ二〇〇頭の島で

御蔵島は、東京から南へ約二〇〇キロメートル、伊豆諸島に属する小さな島です。周囲二〇キロメートルほどの島には、港も集落も一つずつあるだけで、住民は三〇〇人ほどしかいません。東京行きの船は一日に一回、天候によって着か着かないかが決まります。食糧品は週一回の貨物船でやってくるだけで、コンビニなどはありません。ごみ捨ては、時間になったらやってくる収集車を持って、自分で投げ入れます。車とすれ違うときには、相手に会釈します。島のほぼすべてが知り合いなのです。島の暮らしは、ときに内地の生活から想像もできないことが多々あります。そんな島で、現在、妻と三人の子どもたち、島の山で生まれて保護された小さな猫と一緒に静かに暮らしています。

周囲の海には一〇〇頭ほどのイルカたちも暮らしており、私の仕事は、夏の間、島を訪れる観光客のためにイルカカウオツチング船を出す観光業が基本となっています。そして、秋から翌年の春にかけては、釣り、漁協のお手伝い、少々の畑仕事などをして、自然とともに生きています。

私は内地からのイターーン組ですから、島生まれの方々と違った目線で、「島暮らしとは？」「内地と比べてどう違うのか」を実感してきています。そうした体験は、これから島に渡り、住んでみたいと思っっている方に、多少の参考になるかもしれません。でも、島暮らしを目指す方には、それぞれの方が持っている人生のストーリーが必ずあるはず。私の体験を読んで、何かしらのヒントが得られれば幸いではありますが、自分のオリジナルのストーリーから決して離れることなく頑張っしてほしいと願っています。



御蔵島：東京の南200kmの三宅島からさらに18km南に位置する。面積20.55km²、周囲16.4km、人口325人（平成30年2月1日現在）。周囲を100～480mの断崖で囲まれた急峻な地形で、水資源が豊富な島。周辺海域には、野生のミナミハンドウイルカが生息している。



豊かな自然、断崖絶壁に囲まれた御蔵島。

就職をせず、小笠原を経て御蔵島へ

大学時代は経営学を専攻し、卒業後は証券会社への就職を希望していました。子どもの頃から、普通の学校、普通の就職しか考えていませんでした。しかし、就職活動で自

分の人生に初めて向き合った時、「こ

のままでもいいのか？」という声

が小さく聞こえました

。頭では普通の会社への就職がま

ともだとわかって

はいましたが、なぜかその声に従い、

ある会社からもらった採用の内定を

辞退しました。

とは言っても、

何を指すべきなのか

がわかりません。現実からの逃

避かもしれませんが、とりあえずワ

ーキングホリデーを取得し、オーストラリアに一年間滞在することにしました。異国の地で、自分自身は一切何がしたいのかを探る中、初めてサーフィンにトライした海で野生のイルカと出会い感動したことがきっかけで、帰国後はイルカと関わる仕事をしたいと思うようになりました。ただ、知識はまったくなく、どうすればそのような仕事にたどり着けるのか、さっぱりわかりませんでした。

そんなとき、小笠原で行われているイルカウォッチングを雑誌で知りました。直接イルカに関わる仕事ではありませんが、もしかしたらゆくゆく船を持てるかもしれないと小笠原で漁師見習いしながら生活してみることにしました。その過程で、偶然にある方との出会いがありました。小笠原で活動しているイルカ・クジラ写真家で、私の淡い夢を聞いて、アシスタントになってみないかと誘ってくれたのです。

アシスタントといっても、イルカやクジラを撮影する小船の操船だけでしたが、その方が「御蔵島にイルカの調査に行く」というので同行させてもらうことになりました。そこで初めて御蔵島を知ったのです。その頃は、御蔵のイルカの存在はまだ対外的にあまり知られていませんでしたが、島の方々にとっては玉石（荒波で削られた丸い石）のようにごくごく自然なもので、そこにいて当たり前の生き物のようでした。

御蔵島では、調査でイルカと泳ぎながら、初夏から秋ま



観光客に人気のドルフィンスイム。

で滞在しました。短い期間でしたが、島での生活は何となく自分には合うような気がしました。

その後、イルカウォッチング業を営む島の方のお手伝いをさせてもらうことになり、年間を通じて御蔵島に住むようになりました。当時はイルカブームが起こっていましたので、イルカ目当ての観光客はだんだんと増えていきました。そのうち、自分でイルカウォッチングをやってみないかというお話をいただき、船を買って独立し、現在のような生活をするようになりました。

振り返ってみると、当初は「島に住みたい！」という強

い思いはなかつたようです。ただ、偶然が偶然を呼び、流れに身を任せたことで結果的にこうなった、というのが正しいかもしれません。一つ大切だったことは、私がかすかなながらも自分の心の声に耳を傾け、その声に従って行動したことでしょうか。

厳しい生活環境が育む支え合いの精神

夏は、イルカウォッチングの観光客で賑やかな御蔵島ですが、冬は、海が荒れば船が一週間以上も欠航して、食糧が商店からなくなってしまう。映画館やショッピングセンターなど、娯楽と呼べるようなものはもちろんありません。でも島の人々は、その環境を受け容れて生きていきます。断崖絶壁に囲まれ平地がない島ですので、開発もままなりません。それでも、島の方々は島を愛しており、厳しい自然に直面しているからこそ生まれる、助け合う心、優しさに触れることができます。都会のように、生活が便利であることはもちろん良いことでもあります。でも、そうでないがために、お互いが支え合う中に、人間の触れ合い、温かさが生まれてきます。

島に住み始めて二〇年以上がたちました。昔に比べて建物も増え、インターネットのような便利なツールが取り入れられつつあります。ネットでショッピングをすれば、島にいながらにして内地と同じものが手に入れられるようになります。

時代とともに、島の生活も多少は変わりましたが、島の方々の心の奥底には、「人間も自然の一部である」という畏敬の念が変わらずあるように思います。だからこそ、私も、イルカたちも、この島に住み続けられているのではないのでしょうか。



自身のイルカウォッチング船で、家族とともに。

人間も自然の一部として生きる

島に来てから結婚をし、三人の子どもを授かりました。妻も内地出身ですので、島に親戚などはいません。それでも子どもたちを育てていけるのは、成長とともに見守ってくださる島の方々に助けられているからにはかなりかもしれません。ときどき、子どもたちを乗せて船を出します。子どもたちはイルカを見ても、それほど感動はしないようです。子どもたちにとって、イルカは玉石のような存在です。イルカ好きの私にしてみれば、少し寂しさを感じますが……。でも、私が初めて島に来た二〇年前に当たり前であったイ

ルカたちのいる御蔵島の海が、いまもそのままであるということ、それを子どもたちが当たり前のように享受してくれていることは、本当に幸せであると思います。

子どもたちは、目の前にある一瞬一瞬を精一杯楽しんで、御蔵島の自然の中でいまを生きています。私が島の方々を見て感動した生き方、「人間も自然の一部として生きる」という生き方を子どもたちが受け継いでいてくれることをとても嬉しく思い、また、そんな生き方を子どもたちに教えてくれるこの御蔵島に感謝しています。

島へのイターンを目指す方へ

イターンとは、まったく価値観の違う世界への旅立ちだと思えます。たとえどんな世界であっても、良いこと、悪いことがあるのではないのでしょうか。

私の場合は、都会の生活から外れた不便さという「悪いこと」を受け容れたことで、自然とともに生きる生き方を教えてもらいながら、人の温かさに触れるという「良いこと」を体験することができました。そして、その「良いこと」が上回ったことが島に住み続ける原動力となりました。島に住んでいると、たくさんの出会いと別れがあります。意気揚々と移住してきても、島の生活が合わずに短期間で出て行ってしまいう人も数多くいます。五年以上残っている人は、移住者の中でほんの一握りです。

島での生活に疲れてしまう人は、島暮らしへの理想と現

行政からのメッセージ

◎「人と人、人と自然が共生する島」を目指して

御蔵島村では平成22年から、31年を目標年次とした第3次基本構想に基づき、自然・歴史・文化を守りつつ、時流に乗った施策の展開で村を発展させ、「住んでいることを誇りに思える島」「人と人、人と自然が共生する島」づくりに取り組んでいます。もっとも大きな課題は人口の回復であり、特性を生かした産業振興で働く場を確保することで、人口500人の活力ある村づくりを目指しています。

年間の訪島者数は1万人ほどですが、その約7割がイルカ目的での来島です。ゴールデンウィークから10月までの週末は、宿も予約しづらい状態が続いています。

加藤さんは、イルカウォッチング船の船長として、イルカが回遊する場所、お客様が遊泳を安全に楽しめるよう努めておられます。また、漁業組合の組合長でもあり、鮮魚を東京に出荷する一方、骨まで食べられる干物などの加工品づくり、オリジナル保冷バッグやおさかなレシピ本など販売促進グッズの商品開発にも力を注いでおられます。さらに、消防署がない本村で重要な消防団の団長も兼ね、1月から2月に行う夜警など村内の安全を見回っていただき、行政として大変感謝しています。私生活では、奥様と3人の子どもたちと一緒に学校のグラウンドで遊ぶ姿を見かけます。

行政としては、U・Iターン希望者の相談窓口や受け入れ態勢づくりが必要と考えていますが、課題は住宅不足です。移住希望の問い合わせは多くありますが、村内には空き家もなく、村営住宅も満室状態です。人口500人を実現するためにも、新たな村営住宅整備や、産業のあるべき姿に対応した農地整備の促進を図ることで、定住人口の増加と賑わいのある村づくりを目指しています。

(御蔵島村産業課産業建設係 小林 壯)

加藤啓司 (かとう けいじ)

1969年静岡県生まれ。1991年に大学卒業後、翌年にかけてワーキングホリデーでオーストラリアに滞在。帰国後、1993年まで小笠原で生活。1994年御蔵島に移住、イルカウォッチング業に従事。現在、御蔵島漁協組合長、御蔵島村消防団長を務める。

実の狭間で苦しんでいることが多いように思います。濃密な人間関係、内地とは違う島独自の常識、気分転換にウィンドーショッピングに出かけることさえできません。それをどこまで受け容れられるのか、どこまで既存の価値観を捨てて新しい価値観についていけるのか、どこまで割り切

れるのか。そんなことを今一度考えてみてほしいと思います。そして、これから島へのIターンを目指す人には、その土地の良いところ、悪いところを素直に感じ、心の声に従いながら、自分に合った島を見つけてほしいと思います。